

神奈川支部 第30回 学習会 9月4日(土)

「道徳科におけるITCの活用の実際と今後の展望」

☆会員限定サイトでこの学習会の動画、資料を閲覧することが可能です。

講演①「GIGAスクール構想におけるICT端末の活用推進に向けて」 講師 曾根原 加果 先生
(文部科学省初等中等教育局 GIGA StuDX 推進チーム)

チームの活動

全国の学校で研修会のサポート、ICT 活用支援
地域の ICT 活用の把握
ウェブサイト StuDX Style からの情報発信
メールマガジンの配信など

講演内容

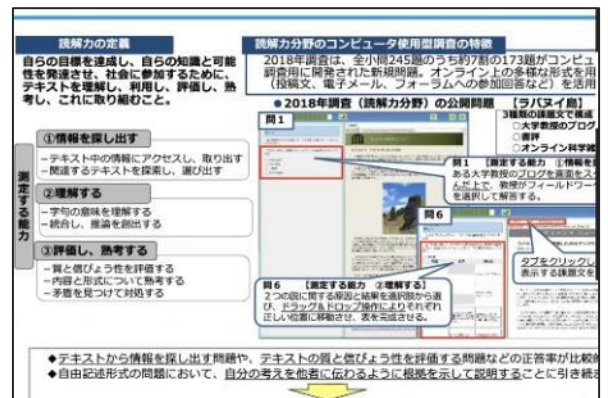
- ①GIGA スクール構想の背景
- ②GIGA スクール構想における授業づくり
- ③2040年ごろの社会



①GIGA スクール構想の背景

【子どもと学習における ICT 活用】

- ・ OECD 加盟国のなかで、日本の子どもたちの学習における ICT 活用の割合は低い。
- ・ しかしスマホは子どもたちの身近に存在しているものである。ゲームや、エンターテインメントにおける活用の割合は高く、休日5人に1人の高校生がスマホを見ているという状況は改善が必要だといえる。
- ・ PISA の読解力調査でも 2015 年からはコンピュータで画面を操作する問題も出題されている。
- ・ 2018 年から完全にコンピュータ使用型問題に移行。タブを選択しながら、情報を比較し自分の考えをまとめたり、ドラッグアンドドロップ、タイピング操作などを活用したりしながら問題を解いていくようになっている。
- ・ これらの問題からも、OECD が現代の子どもたちにメディアリテラシー能力が必要性を訴えていることが分かる。



②GIGA スクール構想における授業づくり

【令和の日本型教育を目指して】

- ・ 2030年の社会と子どもたちの未来は
社会の変化にいかに対処するか。→変化を前向きに捉えて人間ならではの感性をより豊かにしていくかが重要。
- ・ GIGA スクール構想での一人一台の端末機器の配付は、カリキュラムマネジメントの物的な体制整備に位置付けられる。
- ・ 「ICT ならでは」の「強み」を改めて見直してみると、次のようなことが挙げられる。

①多様、膨大な量の情報を扱い試行錯誤することや児童の探究の一助となる。

都市部でも、地方でも、器機を活用し、検索する力があれば情報を得ることができる。

②時間を越えた情報の蓄積、学習過程の可視化は（自己内調整）につながっていく。

録音、録画による学習の記録を残し、自己の変容を振り返ることで、学びの調整に繋がる。

③空間づくりを超えた相互のコミュニケーションが可能となる。

離れた場所でも、オンラインによるウェブ会議機能、協働編集機能、チャット機能などを活用することでリアルタイムかつ双方向の会話や情報の共有が可能となる。

【ウェブサイト StuDX Style の情報発信】

- ・ ICT 機器の基本的な活用
- ・ 学校の公務のオンライン化事例
- ・ 学校教育における一日の ICT 機器活用例
- ・ 各教科での活用
- ・ オンラインを活用した学習指導事例
- ・ 自治体の使用 OS、授業活用例
- ・ STEAM 教育での活用例…
誰でもどの学校でも使える活用例を掲載



機器をこのように使えばよいという HOW TO ではなく、授業改善のための一つのツールとして捉える。教師が ICT 機器の特性や強みを実感し、学習のねらいに近づけるために活用していくことが望ましい。

チカ スタディーエックス
「GIGA StuDX メールマガジン」の配信について

文部科学省では、GIGAスクール構想の下での学習指導における1人1台端末の活用について、情報を求める全ての人々に広くタイムリーに情報提供を図るための「GIGA StuDXメールマガジン」を配信しています。学校はもとより教職員1人1人の皆様からのご登録も可能です。既に相当数の教職員の皆様からご登録いただいています。

配信予定内容：StuDX Styleの最新情報、活用事例や対応事例、子供の声等

登録方法

登録方法1
(QRコードから登録する)

QRコードを読み取り、文部科学省のサイトから必要事項を入力の上、登録をお願いします。

登録方法2
(ウェブサイトから登録する)

STEP 1 「文部科学省 メールマガ」で検索

STEP 2 GIGA StuDXメールマガジンの「新規登録」をクリック

STEP 3 必要事項を入力し「確認」の後、「登録」をクリック

配信内容

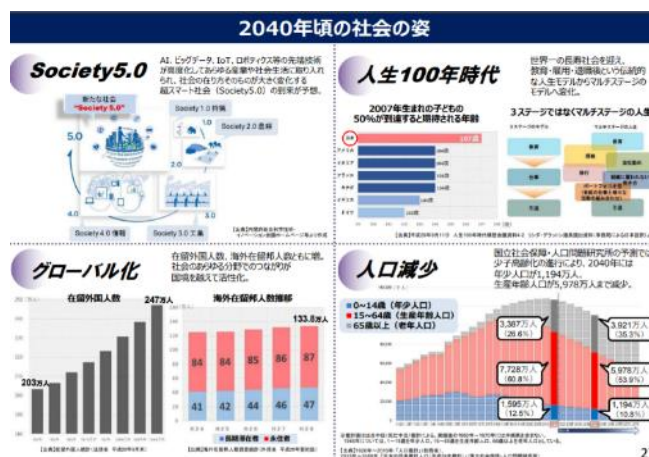
○文部科学省のHPからメールマガジンの登録も可能です。新しい情報が日々更新されているので是非ご登録してみてください。

③2040年ごろの社会

今から20年後の子どもたちを取り巻く社会

→Society5.0、人生100年時代、グローバル化、人口減少

- ・人間とコンピュータの付き合い方は今まで以上に切り離せないものになっていく。
- ・現在14歳の子供の半数は将来107歳まで生きるといわれている。
- ・健康寿命が延びているなか、生涯を通してICTと関わって学び続けていく人生を考えていかなければいけない。



GIGA スクールを基盤とした令和の日本型学校教育では、個別最適な学び、協働的な学び、教育データの活用、公務の効率化、これらを別々に考えるのではなく一体的に捉えて全ての子どもの可能性を引き出すための手立てにしていく必要がある。

講演②「ICTの活用で道徳科授業のアップデートを図る」～GIGAスクール構想下における授業改善の可能性～
 講師 梅澤正輝先生(東京都新宿区戸塚第一小学校教諭)

アップデート→これまでの道徳科授業にICTを効果的に組み込んで新しい道徳科授業の学習方法を見出す。

- Chapter1 道徳科×ICTを考える
- Chapter2 ICTを活用した道徳科授業の実践
- Chapter3 授業づくりや評価で大切にしたいこと
- Chapter4 まとめ



一人一台「Surface Go2」

- ・本体
- ・ペン
- ・充電器
- ・カバー

毎日持ち帰り 充電は自宅で

ドリル学習 (ドリルパーク) 授業での活用 オンライン授業

ミライシード (ドリルパーク) ミライシード(オクリンクム・ムブノート) スカイメニュー(発表ノート等) Micro soft Teams (共同編集)

勤務校での使用端末

- 「可視化」**
…学習内容や状況がはっきり見える。
- 「個別化」**
…習熟度やニーズに応じて学習できる。
- 「共有化」**
…情報をやりとりしたり共有したりできる。
- 「深化」**
…深い学びを実現できる。
- 「活性化」**
…不安軽減したり意欲を高めたりできる。

田中博之 (2021) 『GIGAスクール構想対応実践研修でわかる！タブレット活用授業』(学研教育)

タブレットパソコンが活躍する場面

一人一台端末を使うと…

道徳科で打ち込むのは…？

みんなに考えを見せるのは…？

一緒に編集して…？

ICT×道徳科の相性って??

道徳科での活用場面を考える

	教師のICT活用	児童の活用	効果
導入	1 アンケートと分析→	←回答する	共有・活性・可視化
	2 教材提示(アニメーション)		可視化
	3 教材配信→	教材を読む	可視・個別化
展開	4 個の意見の提示(共有)	←疑問、感想の入力	共有・活性化
	5 個の意見の提示(交流)	←考えや立場の入力	共有・可視化
	6 グループの考えの提示(共有)	←グループの考えを入力	共有・深化
	7 回収(と提示)	←個やグループのメモ	
終末	8 *回収(と提示)	←振り返りの記述や入力	個別・深化
	9 *アンケートと分析→	←回答する	共有・可視化
	10 *説話(動画、画像)		可視化

ICTと道徳科の可能性について、活用法・実践例から紹介する。

子どもの問題意識を引き出す



どうして親切は大切なんだろう？

どうすれば勇気ある行動ができるのかな？

こんな時、どうすればいいんだろう？

自分なら、そうはしないけれど・・・？



子どもの問題意識を生み出す、引き出すことが、「自分事」の学びへつながる。

問題意識（問い）の必要性

自我の芽生えと共に自律的に道徳的諸問題をとらえ、「望ましさについてのもの見方・感じ方・考え方」を確立して自らの道徳的思考・判断・行動のもととなる道徳的価値観を形成していきます。その道徳的価値観形成の際に何をさておいても不可欠なのが、子ども自身の切実なる「問い」なのです。

田沼（2020）「問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり」

「問い」について考え、話し合う（課題探求型）という学び方が、道徳科授業の充実にとって重要。



普段授業で大切にしていること→ICTを活用しながらどのようにこれらを実現できるかが大切である。

【実践例①】

実践例①
6年生「手品師」(正直, 誠実)
～スカイメニューのポジショニング機能～



物語の中で「手品師がとった行動を理解できるか」という問いを、子どもたちは SKYMENU の「ポジショニング機能」を使って考えていく。自分の考えを数直線上に位置付けていくことができる。

この分布図を見ながら相互指名で意見を出し合いながら学習を進めていく、教師は要所で問い返し発問をしていくことで学習を深めていけるようにする。

展開



手品師は、どのような思いで少年との約束を選んだのだと思いますか？（「心情を育てる」に迫る中心発問）

- ・大劇場も夢だが、少年に悲しんでほしくない。
- ・「手品師」という仕事、生き方は、誰かを悲しませてはいけない。
- ・自分にしかできないことだという思い、勇気。



この展開では、端末ではなく、ワークシートに鉛筆で自分の考えをじっくり書かせるようにした

迷いに迷った手品師です。この手品師が、もしも、大劇場を選んでいたら、「誠実ではない」ということになるのですか？（「条件変更」の発問で価値の深い理解へ）

それは違う気がする…。「迷うこと」が大切なのは、夢と比較して自分で判断したという意味では「誠実」。

少年を選んだのは、「男の子への誠実さ」。大劇場を選んだとしたら、「夢への誠実さ」なのではないか。

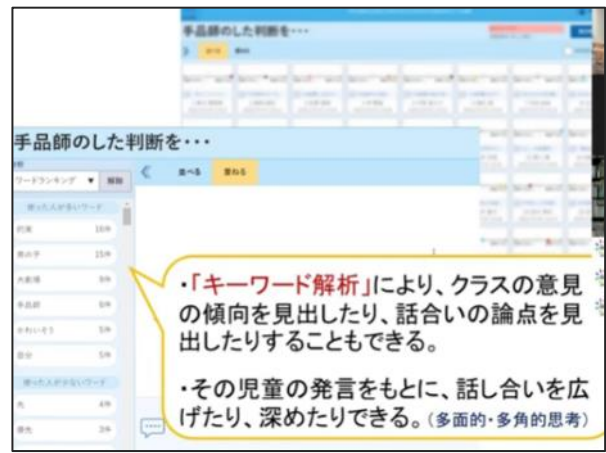
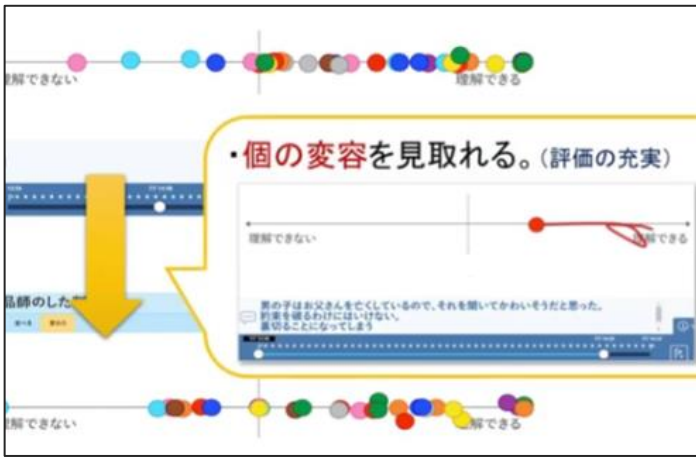
展開

学習課題について、考えましょう。

【学習課題】
誠実に生きるってどういうことだろうか？

誠実に生きるとは、今の自分に一番適切な選択をするためにじっくり考え、そのうえで判断していくことだと思います。私は、少ししか考えずに行動して失敗したことがあります。これからは、そのようなことが起こらないように、人を傷つけないために、本当にそれなのか、自分は心からそれを願っているのか、じっくり考え、よりよい判断ができるようになりたいです。

ICT 活用のメリット



ポジショニング機能を使うことで、考え方の変容の軌跡も残すことができる。また子どもたちが入力した感想などからキーワードを解析することで、教材の多面的・多角的な分析が可能となる。

【実践例②】

実践例②
6年生「自分らしさを生かそう！」
 (パッケージ型ユニットによる学習)
 ~家庭学習×テキストマイニング活用~



- ここではアンケート、道徳科の宿題での活用例を紹介をする。
- OECD の調査によると、日本ではコンピュータを使った家庭学習はあまり行われていない。
- 道徳授業が学校でするものだという固定観念→議論が深まりきる前にいい所で終わってしまう。振り返りまでいかない。これらの問題に対して ICT を活用した新しい実践を提案する。

事前に家庭で一人一台の端末を使ってアンケートを実施する。そうすることで授業では、児童の実態把握の時間を短縮し、初めから議論をスタートできる。(反転学習の考え方) また学習後、家族とともに授業を振り返り感想を送信していくこともできる。家庭で道徳科を知ってもらおうきっかけになる。

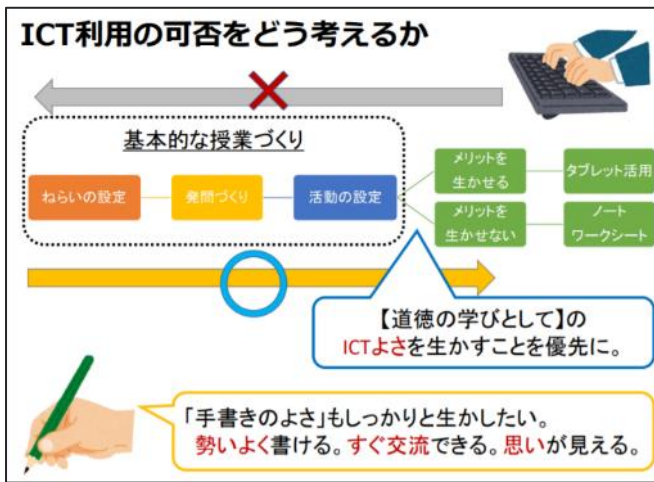
子どもたちから事前に通ったアンケートをエクセルで一覧表表示したり、テキストマイニングを活用したりすることで、子どもの関心、を整理分析し、教材研究に役立てることができる。

【実践を通して振り返り】

なんでも自分たちの考えを可視化、共有化してしまうと、本音を書きにくくなってしまわないかということが懸念される。ICT活用した入力や記述は、充実した話し合いをするための教師の準備のために、まずは活用してみようか。

また評価においては、ICT機器を使うことで、様々な面から、子どもの変容を見取ることが可能となり評価が充実していく、しかしICTの操作技能の差によって、評価に差が出ないように子どもを適切に見取っていく教師の力が必要である。

メリット	デメリット
【ICTそのもの】 ・時間削減(本題に時間をかける) ・多くの児童の表現 ・瞬時の共有化 (意見が広がる→共有、アンケート集計) ・学びのデータ蓄積(説明、管理、評価) 【道徳の学びとして】 ・アンケート集計(価値理解や人間理解) ・家庭学習を取り入れ、中心発問以降を深化させる ・意見が広がる(多面的・多角的思考) ・動きのある板書 (多面的・多角的思考、変化) ・学びや変容の見取り、蓄積 (学習状況の評価)	【ICTそのもの】 ・慣れていないと時間がかかる ・回線の不具合 ・忘れ物、充電切れの児童への対応 【道徳の学びとして】 ・共有化が本音を出しにくくする懸念 ・共同作業からは個が見えにくい ・打ち込みでは心が見えにくい ・文字との対話になる懸念 →心の育みとしての道徳科 →やはり、議論は顔を見たい →入力や記述は、「話し合いの準備」



まとめ
～授業アップデートの可能性～

现阶段で効果的なICT活用だと感じること
 手探りしながら、取り組む中で…

- ①スケール図など思考ツールとしての活用
- ②アンケート結果などの瞬時の共有(スリム化、深化)
- ③評価の充実

今後の可能性～さらにやってみみたいこと～

☆グループでの活用
 ・共同作業の可能性を探る
 ・意見の書き込みの俯瞰で道徳的価値の見方を広げる
 →話し合い活動の充実

☆家庭学習でのさらなる活用
 ・事前読み(教材配信)
 ・事前読みと「問いづくり」
 ・家庭での振り返り
 →本時の学習内容の充実へ

さまざまな実践を重ねていく中で、新しい展望も見えてきた。今後もICTでしかできないことの可能性を探究していく。

【参考文献】

- ・田中博之(2021)「GIGAスクール構想対応 実践事例でわかる! タブレット活用授業」(学陽書房)
- ・田沼茂紀(2020)「問いで紡ぐ小学校道徳科授業づくり」(東洋館出版社)
- ・赤堀博行(2018)「道徳の評価で大切なこと」(東洋館出版社)
- ・パトラー後藤裕子(2021)「デジタルで変わる子どもたち—学習・言語能力の現在と未来—」(ちくま新書)
- ・「道徳教育2021年6月号 GIGAスクールに対応した道徳ICT活用術」(明治図書出版)
- ・「生きる力6」(日本文教出版)／「私たちの道徳(5.6年)」
- ・文部科学省「学習指導要領解説「総則編」／「特別の教科 道徳編」
- ・文部科学省「令和元年度補正予算(GIGAスクール構想の実現)の概要」
- ・15歳のデジタル・テクノロジーの学習への利用
 (文部科学省国立教育政策研究所「OECD生徒の学習到達度調査2018年調査補足資料」)
- ・中教審答申「令和の日本型学校教育」
- ・内閣府ホームページ

【質疑応答】

Q1 (参会者) ICTの機能に目が行ってしまいがちになるが、提案実践はデジタルとアナログICTの使いどころを見極めているなど感じた。ポジショニング機能や、キーワードの抽出を行って、授業における考え方を俯瞰的に見る活動は、自身の学習にも取り入れていきたいと感じた。その辺りで意識していることなどがあれば教えていただきたい。

A1 (提案者) 道徳の授業では本音を大切にしたいと考えている。しかし高学年では本音を出すことが難しい場合もある。そのためA、Bどちらの気持ちに近いかなど、選択肢を与えたり、フォームなどを使ってアンケート形式で回答したりできるような簡単なものから始めるとよいと考える。学級の実態や学習のねらいに応じて俯瞰できるという機能は効果的であると考えている。

Q2 (参会者) 手書きとPC入力のメリットとデメリットについて教えてほしい。

A2 (提案者) 打ち込みだから駄目というわけではなく、「手書きのもつよさ」をプラスしていくことが大切ではないか。学習の個別最適化、支援の面から考えても、書くことは苦手だが文字入力をするすることで、自分の考えを書ける子もいる。自分に合った手段を選べるのが大切だと感じている。

Q3 (参会者) 大学のどの教科でも教職課程の学生のICT活用は必須になってきている。教員を志す学生にどんなことを教えておくべきか。

A3 (提案者) まず、器機に使い慣れていくのが大切だと感じている。そのうえで、どんな場面で使うと有効なのかということを考えていくとよい。自分の指導の引き出しを増やしていく感覚が大切。

Q4 (参会者) 「文房具」としてのICTの活用についてお考えを聞きたい。

A4 (提案者) 現在、教師がICTの使い方を提案している側だが今後、子どもたちが活用していく形になっていくのが理想的ではないか。例えば自分のクラスでは国語のテストを手書きでも、パソコンで入力でもどちらでも選択できるようにしている。子どもの選択の幅を広げることが大切。

Q5 (参会者) ICT活用の意義そのものについてお考えを聞きしたい。学習の個別最適化を実現する手立てであるはずだが、やはり現実的には、家庭による教育格差は難しい問題で、ICTを使った、家庭学習のスタートラインにも立てていない子どももいるのではないか。

A5 (提案者) 実際に家庭による差は存在すると思うが、例えば学習アンケートによる回答の期間に幅をもたせたり、その期間中に、回答が難しい家庭に連絡や支援をしたりしながら足並みをそろえていく方法などがある。長期的な視野で、家庭や子どもの状況に応じながら取り入れていくことが大切ではないか。

Q6 (参会者) ジャムボードによる協働編集についてお話を伺いたい。

A6 (提案者) 対話はやはり対面がよいという思いはある。ICTは対話のきっかけとしてとらえている。ツールとして使っていくことが大切ではないか。

Q7 (参会者) Google フォームズを活用した授業の様子について教えていただきたい。

A7 (提案者) 長文の入力が難しい子も、考えの選択、短文による回答ならできる。無理のない範囲で取り入れるようにしている。

Q8 (参会者) フォームズを使った授業準備について様子を教えていただきたい。

A 8 (提案者) 子どものアンケート結果の入力がなくなったので、回答を数える手間や、集計時間が短縮された。データを入力するとグラフなども出てくるので、それを基に教材研究をすることも可能になった。ICT を活用することでできた時間やデータを活用しながら、今まで以上に深い「問い」を考える事にもつながっていると思う。

Q 9 (参会者) とても勉強になった。実践を見て、「失敗から成功につながった話」「生命の偉大さを感じる瞬間」など教師がキーワードを与えて「道徳の調べ学習」のようなものも可能だと感じた。学校の先生方に、道徳における ICT を活用を勧める時、どんなことから始めていけばよいか。

A 9 (提案者) 紹介した SKYMENU ポジショニング機能のように、比較的使いやすいものから 7 試してみてもどうか。まずは使ってみることが大切だと感じている。

Q 1 0 (参会者) 改めて「手書き」のよさとは何でしょうか。

A 1 0 (提案者) 思い付いたらすぐに書けること、交流がすぐできる事、思いを筆跡から読み取れること等があると感じている。

(参会者) ありがとうございます。書きながら思いを深めていくという良さもあると同時に、道徳で ICT 活用の入力することの有効性もエビデンスベースで今後も検証していけるとよいと感じた。

Q 1 1 (参会者) 子どもたちはもしかしたら、今まで使っていなかった ICT 器機を使うことの「目新しさ」に対して良いと感じている部分もあるのではないかと？

A 1 1 (提案者) 以前、国語の授業でも打ち込みと手書きのどちらがよいと思うと聞いたところ、入力をした方がよいという子どももやはりいた。今は子どもたちが、「学びを選んでいける時代」にあると思う。子どもと教師が、一緒に ICT を使った学びの在り方を考えていくべきではないか。

Q 1 2 (参会者) 今まで黒板に自分のネームカードを貼りにいくような活動が、ICT を使うことで、画面上で操作できるようになった。一方で、自分の名前を黒板に針に行くまでの葛藤や、迷いといような、実際にやってみることでしか感じられないこともあるのではないかと。

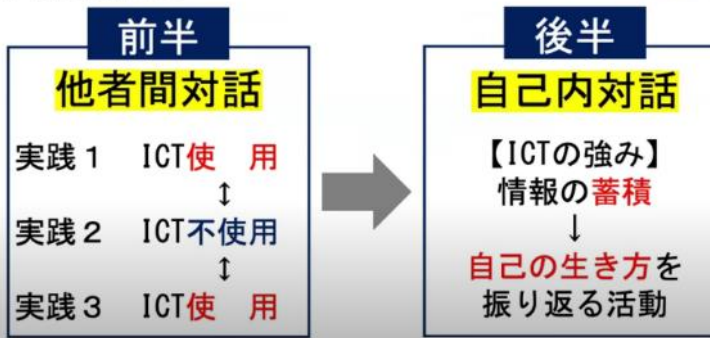
A 1 2 (提案者) アナログの良さも改めて考えながら ICT を適切な場面で使うことが大切。「適切な場面」とはどんな場面なのか教師が考えていることが大切だと感じる。また SKYMENU のポジショニング機能は、自分の考えが変わった軌跡もきちんとパソコン上で見ることができる、そういった機能も視野に入れながら活用するとよいのではないかと。

Q 1 3 (参会者) 子どもたちはポジショニング機能を使う時は友だちの表情、黒板のスクリーン、自分の端末の画面など、どんなところを見ながら、話を聞いているのか。

A 1 3 (提案者) 色々な児童が自分に必要な情報を選んでいている。友だちの考え方の変容などに注目することなども面白いと思う。



本日の流れ



ICT を活用した対話活動

- ・他者とともに生きることを考えていく道徳の授業で、端末のみを見て相手の顔を見ないのはどうなのか
- ・ICT は私たちの生活の中に自然な形で取り入れられている。
- ・道徳科で ICT を使うか？使わないか？ 0 か 1 0 0 の選択ではなくどの場面で ICT を使うかということが大切である。



他者間対話と ICT

【実践①】

子どもの声からICTの活用場面を探る

	実践 1 (7月6日)	実践 2 (7月8日)	実践 3 (7月13日)
ICTの使用	中心発問に対する考えをICTを用いて交流 	不使用	実践1と同様の活動
問い	ICTは、対話的な学びを促進するか？	ICTの長所と短所をどのように捉えているか？	ICT活用方法は変化するか？
アンケート	iPadを使ったことで、自分の考えが深まったり変わったりしやすくなりましたか？	①iPadを使う長所を教えてください。 ②iPadを使う短所を教えてください。	1回目「すれちがいのときと比べて、あなたのタブレット端末の使い方に变化(回答共有画面の見方、話し合いのときに注意したことなど)はありましたか？

実践 1

ICTは、対話的な学びを促進するか？

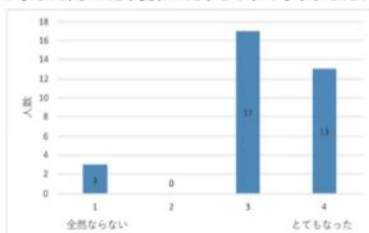
今回の提案 実践①～③の概要

実践 1
ICTは、対話的な学びを促進するか？

【アンケート】
iPadを使ったことで、自分の考えが深まったり変わったりしやすくなりましたか？

子どもの声

iPadを使ったことで、自分の考えが深まったり変わったりしやすくなりましたか？



ロイロノートを使って自分の考えを記述→その後話してみたい友だちと対話してみる。考えが深まったという意見が多くみられる。自分の考えが深まったり、変わった理由として次のようなものが挙げられる。

子どもの声

① 自席でみんなの考えを知ることができる。
(発言が少ない人)
→ 気になった考えの人に質問することができる。

② 自他の考えの比較がしやすい。
→ 自分の考えと繋げることができる。

③ 友達の考えが整理されていて分かりやすい。
文字言語、限られたスペース、推敲がしやすい。

④ 図を使って説明することができる。

⑤ いつでも友達を考えを見直すことができる。

⑥ メモを蓄積できる。

子どもの声

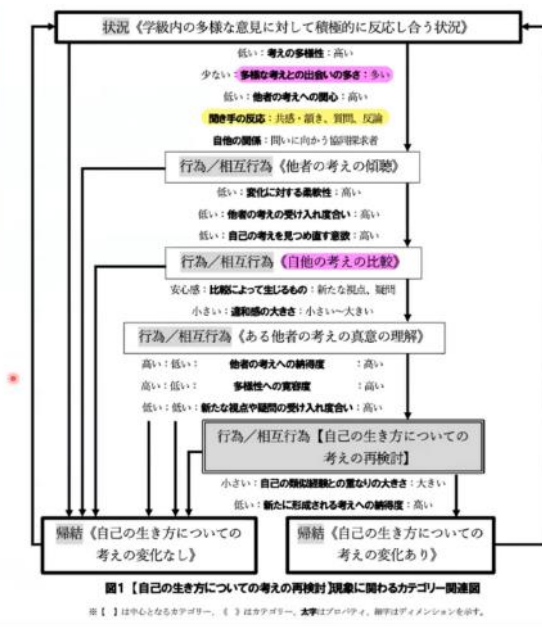
「話し合いで言い分をもっと聞きたいから」

「ちゃんと話し合いをしたいから」

「時間が少なく、とくに、納得できるというものがなかったから」

実践1の考察

拙論 (2021) 「自己の生き方についての考えを深める過程の分析—道徳科授業の話し合いを通して—」『日本道徳教育学会 神奈川支部研究紀要』p. 16



子どもたちが、友だちとの話し合いを通して、どのようなプロセスを経て考えを変化させるかを表したものである。
太字の条件がそろった場合右側の矢印(考えの変化あり)に進んでいくことができる

【実践②】

実践2

ICTの長所と短所をどのように捉えているか？

実践2回目の概要

内容項目：相互理解、寛容
教材：「銀のしょく台」（学研「新・みんなの道徳5」）

● 中心発問「司教が差し出した銀の燭台には、どのような思いが込められていたのでしょうか」

● **学級全体での話し合い**
※ICT不使用

実践②の概要

実践2

ICTの長所と短所をどのように捉えているか？

【アンケート】

① iPadを使う長所を教えてください。

② iPadを使う短所を教えてください。

タブレット端末を使う長所

似た性質のものを集めてまとまりを作る手法

「KH Coder 3」の「階層的クラスター分析」を使用

- 「みんな」を強制抽出する語に指定
- 総抽出語（使用）：550 (254)
- 異なり語数（使用）：148 (97)
- 階層的クラスター分析を実行する際には、Jaccard係数を用いたward法にて分析

子どもたちの回答内容をテキストマイニングソフト KH Coder 3 を利用して分析する。

タブレット端末を使う長所

1)	いつでも色々なことを調べたり、友達の見解を知ることができたり、編集できたりする。
2)	(文字の打ちやすさ、共有のしやすさによって) 短縮された時間を使って、色々な人の意見が分かる。
3)	情報を集められる。
4)	手を挙げなくても回答を共有できる。
5)	字が汚くても大丈夫。
6)	一気にみんなの意見が分かる。

タブレット端末を使う短所

1)	そのときにやるべきことと別のことをする人が出てきてしまう。
2)	タブレットに集中しすぎて、先生や友達の話が聞けなくなる。
3)	紙に書くときの字が汚くなってしまったり、目が悪くなってしまったりする。
4)	生の声が聞けないため、その人の詳しい意見(本当の気持ち)が聞けなくなる。
5)	事実を調べて分かるけれど、相手の本当の気持ちは分かりにくい。
6)	タブレットを出したり、文字を打ったりすることに時間がかかると、本音を理解し合うための話し合いの時間がなくなる。

児童からこのような回答が見られた。このアンケート結果はあくまで本学級における実態として捉える。

【実践③】

実践 3

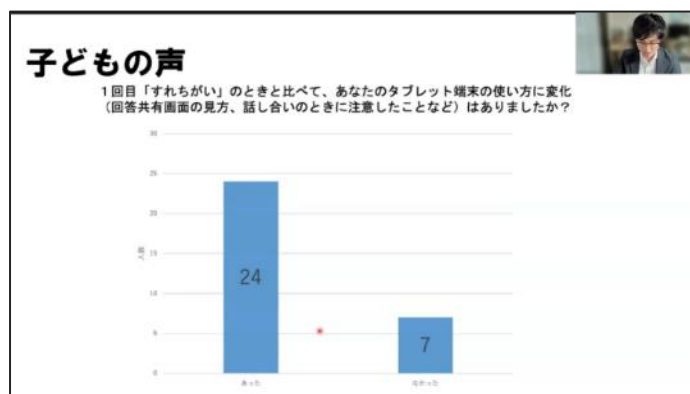
ICT活用方法は変化するか？

実践 3

ICT活用方法は変化するか？

【アンケート】
 1回目「すれちがい」のときと比べて、あなたのタブレット端末の使い方に変化(回答共有画面の見方、話し合いのときに注意したことなど)はありましたか？

Google Earth を活用したり、動画を見たり…児童によって ICT の活用方法は様々である。教師が一斉的に活用方法を明示することで、かえって、子どもたちの ICT 活用の可能性を狭めてしまうことも考えられる。



- ### ICTの活用方法の変化
- ① ICT機器の使い方の変化
 - ② 友達との関わり方の変化
 - ③ 友達の意見の見方の変化

子どもに対してアンケートを取ったところ ICT の活用方法に変化があったという回答が多数みられた。活用方法の変化には次のようなものが挙げられる。

ICTの活用方法の変化



① ICT機器の使い方の変化

- ・「比較画面を使って一気に見れるようになったからわかりやすくなった」
- ・「前よりも、早く送って話し合いもいっぱいできた」
- ・「メモとして使いました」

ICTの活用方法の変化

② 友達との関わり方の変化

- ・「1回目の時は、私は友達のところに行ったけど話はしないで黙ってました。でも2回目の今回は、自分の意見も言えたり友達の意見も聞きました」
- ・「あまり発言しない人の意見に質問をしに行きました。理由はあまり発言しない人の意見は貴重だと感じたからです。また、違う意見の人に質問をしに行きました」

前半のまとめ

ICTの活用方法の変化

③ 友達の意見の見方の変化

- ・「回答共有されているロイロノートのところでわからないところを分析して、わからないところってこう分らないんだけどどう？と質問しやすくなりました」
- ・「色々な考えが新たに生まれるからそれを真似るようになった」

ICT活用場面
直接的
コミュニケーション場面

- ・多様な考えとの出会いの場面
- ・自他の考えを比較する場面
- ・蓄積した情報を基に、考えを見つめ直す場面
- ・他者の考えの真意を確かめる場面

自己内対話とICT

児童の振り返りを読んだ時、その内容が果たして「自己の生き方レベル」まで落としているか、深めることができているかが重要である。内容項目、道徳的価値の解説になってしまっていないか教師が読み取っていかねばいけない。

学習の終末は子どもたちにとって、自らの経験を振り返り、自己の生き方を考え直す場面にしてほしいが道徳的価値と自身の経験を結びつける場面に難しさがあるといえる

道徳教育の実効性を高めるために

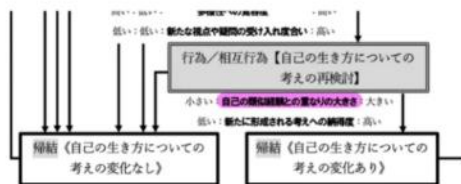


図1【自己の生き方についての考えの再検討】段階に関わるカテゴリー関連図

※【】は中心となるカテゴリー、()はサブカテゴリー、実例はプロトタイプ、縦行はディメンションを示す。

ナラティブ・アプローチにて生き方を変える



「ナラティブという言葉には、『語り』と『物語』という二つの意味が含まれている」

野口裕二 (2002) 『物語としてのケア—ナラティブ・アプローチの世界へ』医学書院、p.20

学習を児童の生活に返していくために、「ナラティブ・アプローチ」を取り入れてみる。

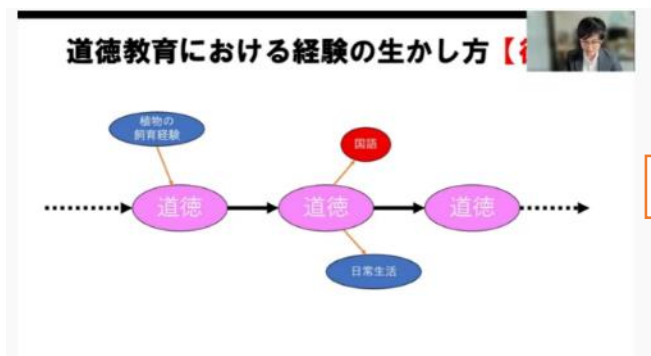
ナラティブには「語り」と「物語」という二つの意味が含まれている。

人生において物語の書き換えが常に必要だといえる。

筋書にはない自身の経験にスポットが当たることで生き方を変化させていく

学習者である子供たち自身が過去と未来を繋いで生き方の方向付けをしていく。

従来の道徳の授業では教師が筋書きを与えすぎているのではないか。



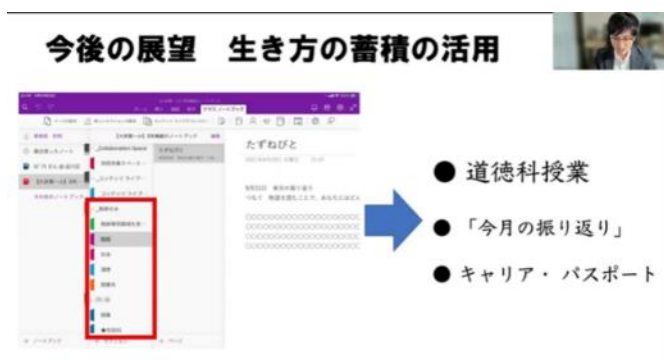
従来型の道徳



ナラティブによる道徳

〈従来型〉経験が一単位時間の授業中で収まってしまい、そこから派生する経験だけにとどまっていた。
〈ナラティブ〉自分の生活経験すべてを繋ぎ、人生を大きくくりな道徳教育と捉える。ナラティブは一人一人違う。それぞれが生き方のベクトルを変化させていく。過去からの振り返りは一直線ではなく、それぞれが物語を歩み続けた軌跡ともいえる。

ICTを活用した道徳のナラティブの授業実践



Microsoft社のOneNoteというアプリを活用して、今までの振り返りをデータとして蓄積していくことで自身の生き方を見つめ直すことを促すことができる。

質疑応答

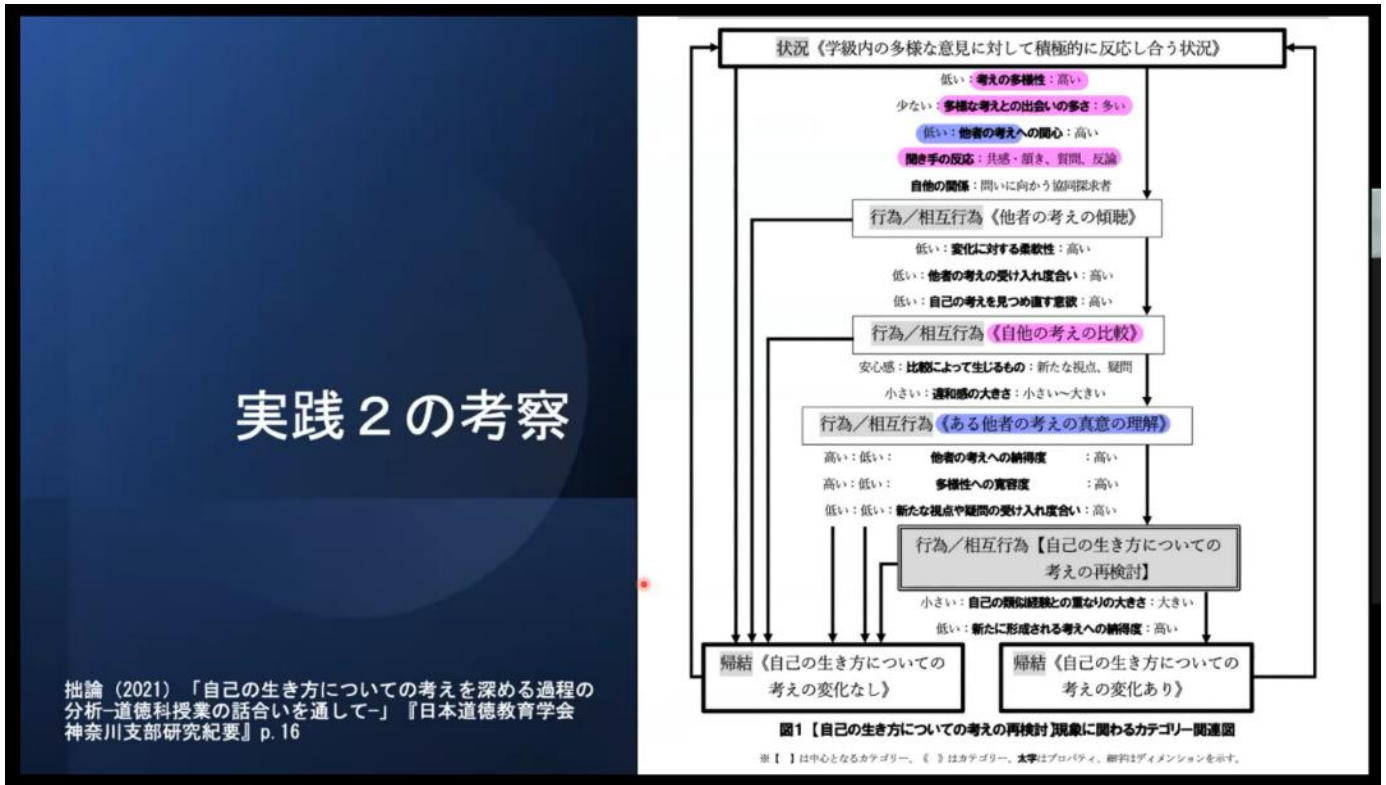
Q1 (参会者) 自分の意見が画面上で全て共有されることは、メリットもあれば、デメリットもあると感じる。行動経済学の視点からも、情報が多ければ、必ずしも適切な判断や、正しい実態調査につながるわけではないことが証明されている。たくさん情報があることで、子どもたちが「分かったつもり」にならないような指導や検証が今後必要かと思われる。またICTによる質問は、外国籍や、学力差によって理解に差が生まれる可能性もあるので、今後も調査が必要なのだと感じた。

A1 (提案者) ICTリテラシーの質の分析は今回行ってないが、教師が画一的に指導することで、逆に子どもの考える可能性の幅を狭めることも考えられる。クラス35人の意見を全部読める子もいれば、一人の友だちの意見を読んで、その子に質問に行く等、様々な学びの形が存在すると感じた。

Q2 (参会者) カテゴリー関連図 (下図) について

自分の考え方で、変容を見取る、認知心理的なアプローチは、今までブラックボックスだった「心の変容」といったものに切り込んでいく上で有効な手段だと感じた。この図のカテゴリーにある「他者の関心」についてだが、ICT を活用すると機器の操作や画面に注目が向いてしまい、必然的に他者の関心がなくなってしまうという、パラドクスがあるのではないか。

A2 (提案者) まず教師ががんにがらめに活用ルールを決めるのではなく、児童が、飽きるまで器機を使いこなす。この状態をクリアすることで、機器ではなく他者に意識が向かいこのカテゴリー関連図が機能していくのだと考える。教師の子どもへの投げかけ方や、さじ加減が重要になってくると感じる。



Q3 (参会者) 上から4つ目と5つ目のプロパティである「聞き手の反応」と「自他関係」に高低のディメンションがないのはどういった理由からか。

A3 (提案者) この関連図は、グランデッドセオリーアプローチという手法を用いている。ディメンションは必須ではなく当てはまる方だけを選ぶようになっていけば成立するためである。

Q4 (参会者) 考えを共有化することで、子どもたちは本音を書けなくなるのでは。

A4 (提案者) これは私見だが、自分の考えが書けないということは、「なぜ書けないか」という理由を考えることが大切であると感じている。何か別の支援が必要だというサインでもある。もしクラスメイトから、自分の意見を「違うんじゃない」と言われることを気にして書けないのであれば、それは、ICT 活用の問題ではなく、クラス全体の指導が必要であることなのだと考える。発達段階、家庭の状況など、書けない場合に子どもの心とまず向き合うことが必要だと考える。

Q5 (参会者) 「ナラティブ」について興味深く話を聞かせていただいた。教育的にも重要なアプローチであると考えている。

A5 (提案者) 自身も勉強中であるが、文学、医学、社会学におけるナラティブの研究はいくつかある。しかし教育学における、とりわけ道徳におけるナラティブの先行研究はまだ7~8本くらいしか見つけることができていない。今後も研究を続けていきたい分野である。

Q6（参会者）振り返りを全体共有する時と、個人で書く時において、書く内容において子どもたちに変容があったか？

A6（提案者）

あると感じている。手をあげなくてもパソコンでなら意見を書けるという子どももいる。また OneNote は本音を書きやすい、ロイロノートは友だちが見るので書かれる意見に変化が見られた。

Q7（参会者）OneNote の活用について。個人の振り返りをするのであれば道徳ノートでも良いと思うのだが、活用するメリットとしてどんなことが挙げられるか。

A7（提案者）教師が質問するフォーマットを教科ごとに一斉配信、一斉集約できるということがまず挙げられる。また文字を書くことが苦手な児童も、写真を撮ることで、ポートフォリオ的に自分の学びの過程を振り返ることができる事もメリットだと感じている。

☆「道徳として変わらないもの」「ICT を活用していくことで新しくできるようになったこと」

様々な授業の可能性が広がることを実感した学習会でした。3人の講師の先生方ありがとうございました。